

| | |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| Title | 剰余の力学 : What Maisie Knew 一考 |
| Author(s) | 好井, 千代 |
| Citation | Osaka Literary Review. 24 P.85-P.96 |
| Issue Date | 1985-12-20 |
| Text Version | publisher |
| URL | https://doi.org/10.18910/25531 |
| DOI | 10.18910/25531 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

剰余の力学

— *What Maisie Knew* 一考 —

好井千代

I

Henry James 中期の小説 *What Maisie knew* (1897) では、子供の主人公 Maisie の外界認識が不安定なために、Maisie がほんとうに外界を認識できたのかどうかについては、大いに疑問の残るところである。

Stuart Hutchinson は、Maisie の外界認識の不安定さは、Maisie の外界認識の不可能性を示すものであるとする。他ならぬこの小説の題名にある “knew” という動詞の時制が、認識が過去や未来と安定したつながりを持った普遍的現在に属することを示す現在時制ではなく、ひとつの時にしか属さない限定された認識を示す過去時制であることに着目した Hutchinson は、Maisie の認識のあり方を、いつまでたっても一時的で部分的で相対的なものであり、最終的に何らかの価値体系へまとめ上げられることのないものと考えてるのである。¹⁾

本稿では、Maisie の外界認識は究極的には不可能であるとする Hutchinson の説を基本的には受け継ぎながら、Maisie の外界認識が不可能である理由を、外界の特殊な存在様式そのものの中に探ってゆきたいと思う。

Maisie の運命は、他のどんな女の子よりもすぐれた理解力を持っているにもかかわらず、“much more than she at first understood” (p. 9)²⁾ を見たことであつたが、“phantasmagoric” (p. 9) な外界に充足した意味を付着させることのできないのは、Maisie の無知のせいというよりもむしろ、Maisie を無知のままに放っておく外界のせいである。Maisie の実母 Ida は、“shading off ... into the unknowable” の様子をしており、Maisie に満足のいくような意味を与える代わりに、“Find out for yourself!” (p. 34)

と鋭く言い放つ。外界は、Maisie に意味を与えようとはせず、意味をたずねられたとしても、“sounds of derision” (p. 34) で答えるだけのようになってしまう。このように、意味に対して留保の姿勢をとる外界とは、いったいいかなる存在であるのか。

II

Maisie を取り巻く外界は、上流社会というある特定の社会階級である。この階級は、社会の上層部にありながら、社会の中枢部からは除外されている。なぜなら、ものどもの価値を生み出して社会の規範を作り上げて、社会の中枢部を形成する生産的な階級（その中心は、もちろん、文字通り中産階級、ブルジョワジーであろう）の存在基盤は、家族と仕事といえるが、この両方に対して、上流階級に属する Maisie の両親は、極めて希薄な意識しか持っていないからである。そもそも、Maisie の実の両親が離婚するところから、この小説は始まる。彼ら、特に子供との結びつきが強いはずの実母 Ida でさえ、Maisie に全く愛着を感じていないことは、“Mamma doesn't care for me Not really” (p. 83) という Maisie の言葉からも明らかである。Maisie の義父 Sir Claude は、“there are no family-women—hanged if there are! None of them want any children—hanged if they do!” (p. 61) と言って、妻や母となって家族の要となるべき女性が皆無であることを指摘する。だが、自称 “family-man” (p. 61) である Sir Claude も、結局は、義理の娘 Maisie の養育よりも、Maisie の義母である魅惑的な Mrs. Beale との恋を選びとるのである。

仕事の方も同様である。Maisie の実父 Beale Farange は、若い頃は外交官になるはずであったが、“momentarily attached, without a salary, to a legation” (p. 8) という一時的な無給の職についただけで、その後は外交の職につくこともなく、果ては金持ちのアメリカ人女性の厄介になるという寄生虫のような存在になってしまう。Sir Claude もまた、議員生活に入ることなく、恋愛の駆け引きに忙しい。Ida や Mrs. Beale ら女性達

は、言わずもがなである。

このように、Maisieの両親達からは、家族と仕事という要素が、実質的には欠落している。そして、これら二つの要素が、前述の通り、社会を束ねる意味体系を生み出す生産的な階級の存在基盤であることを考えるならば、この両方を欠く Maisieの両親達は、意味の生産行為に携わらない、いや携わることのできない非力な非生産的な階級の人間であることになろう。では、意味と意味の生産に無縁な彼らの存在基盤は何か。

John Carlos Roweは、*The Turn of the Screw* 論において、非生産的な貴族階級のあり方を、言語の意味決定不可能性と関連づけて考察している。³⁾ *The Turn of the Screw*は、正しい意味を求めて循環し続ける“unreadable”な小説であり、この小説の“unreadability”の metaphor が、作中人物の the Uncle であるとする Shoshana Felmanの説⁴⁾に対して、Roweは、the Uncleの存在様式そのものを解明することによって、“unreadable”なこの小説は“readable”なものとなると主張する。なぜなら、the Uncleは、意味を生産することのない非力な貴族階級の人間であり、彼の存在は、いわば言語の意味決定不可能性の上に成り立っていると考えられるからである。

the Uncle, who appropriates the essential undecidability of language Because he identifies himself with all that exceeds the determinate meanings of culture (represented in the narrative by written “letters”), As the one who refuses to read and writes only to refuse to read, he excludes himself from the central and inevitable labor of the culture to “produce” meaning. In his extravagance, he becomes the figure of what cannot be read.⁵⁾

非生産的な貴族階級は、自らの非力さを逆手にとって、あらゆる固定した意味を逃れ出てゆく剰余性、曖昧性を、自らの存在基盤とするのであるが、そのような剰余的な存在となるための具体的な手段として、the Uncleは、意味を求めて狂奔する the Governessに、決して彼女の仕事に自分を巻き込まないようにという“singular, determinate prohibition”⁶⁾の言葉をつ

きつける。この禁止の言葉により、the Uncle は、不在の存在となり、the Governess、そして、必然的に the Governess の役割を演じさせられる批評家達の投げかける意味の網の目から逃れ出してしまうと Rowe は考えるわけだが、*What Maisie knew* では、事情は少し異なる。Maisie の両親達は、不在の存在となることはない。彼らは、Maisie の認識対象として、あるいは Mrs. Wix の批判対象として顕在化している。不在によってではなく顕在によって意味体系から抜け出し、剰余的な存在となるために、彼らが用いる手段は、現われ出た姿、appearance である。

III

Mrs. Beale は、最初、Maisie の家庭教師であったにもかかわらず、Maisie の実父 Beale Farange と結婚し、更に Sir Claude と情事を持つことになるが、それは、彼女が始めから、階級の異なる Beale Farange 達に多分に類似した人間であったからだといえる。Mrs. Beale は、全く家庭教師らしくない家庭教師であった。決してエプロンをしない彼女は、非常に美しく、雇い主の Ida よりも巧みにフォークを操った。“Her task was homely, but her movement, like all her movements, graceful” (p. 17)。美しい容貌と優雅な身のこなしによって、Mrs. Beale は、結婚前の Miss. Overmore という名が示す通り、働かねばならない、従って生産的な出身階級からもともと浮き上がり、上層の階級により近い存在であった。つまり、このような見事な appearanceこそ、Mrs. Beale と Beale Farange 達を結ぶ共通の絆であり、何よりも、Beale Farange 達 非生産的な階級の人間を特色づけるものなのである。

実際、Beale Farange や Sir Claude, Ida 達は、Mrs. Beale 同様、そろって美しい容貌を持ち、優雅なふるまいをする。“Like her husband she [Ida] carried clothes, carried them as a train carries passengers” (p. 8) という描写にもあるように、その身だしなみも相当なものである。彼らの appearance の見事さは、Maisie にその崇拜を促すほどだ。

Princely was what he [Sir Claude] stood there and looked and sounded; that was what Maisie for the occasion found herself reduced to simple worship of him for being. (p. 259)

彼らが、完璧に近いまでのすばらしい appearance を備えていることは、彼らのふるまいが俳優の演技のように見え、彼らの織りなす世界が一種劇場性を帯びていることから明らかである。Maisie は、彼らの行う “performance” を鑑賞する “a mite of a half-scared infant in a great dim theatre” (p. 9) にたとえられ、Ida には女優のイメージが振り当てられている。

what idea, as she now came grandly on, did mamma fit? — unless that of an actress, in some tremendous situation, sweeping down to the footlights as if she would jump them. (p. 142)

彼らが、それほど見事な appearance を備えているのは、appearance が、彼らにとって、欠かすことのできないものであるからだ。appearance という、すぐに、その対立概念である reality が思い出されるが、彼らにとっての appearance は、reality と切り離され、対置される appearance であろうか。Ida と Beale Farange について、“they were awfully good-looking — they had really not been analysed to a deeper residuum” (p. 7) という描写があるが、彼らはもともと appearance しか持っていないのではないか。確かに、Sir Claude は、appearance とは区別された自分の reality があることを力説する。彼は、“Whatever it [my type] may be I dare say it deceives you” と述べて、自分の appearance の当てにならないことを指摘した後で、次のように強調する。

“The truth about me is simply that I’m the most unappreciated of — what do you call the fellows? — ‘family-men.’ Yes, I’m a family-man; upon my honour I am!” (p. 61)

しかし、彼の実際の行動は、彼のこの言葉を裏切っている。前述の通り、

彼は、Maisie の父親に収まって、“family-man”の面目躍如たるところを見せるのを放棄する。彼は、appearance から reality を区別しようとするにもかかわらず、自分の reality とみなすものを自ら否定し、appearance だけの存在となっているのである。従って、Sir Claude 達は、appearance の下に reality を隠していたり、いつかは appearance を脱ぎ捨てて、reality を現わしたりするのではない。appearance によってのみ存在する彼らにとって、appearance はそのまま reality であるのだ。

では、appearance が reality と同一となると、いかなる事態を招くのか。appearance は、普通、reality と対になって連想されるところから、real なもの、真実のものとは正反対の、何かしら欺瞞的なものと設定されがちである。事実、Sir Claude は、自分の appearance を“deceives you”であるとして、その欺瞞性にはっきりと言及している。つまり、Sir Claude 達の appearance は、いかに様々の意味の可能性をはらんでいても、その意味を解釈する者を一人残らず、“deceive”するものである。彼らの appearance が提示するのは、真実の、確定的な意味ではなく、一時的で流動的で不安定な意味なのである。しかし、appearance 自体が reality である彼らにとっては、そのような種類の意味ともいえないような意味が、いわば本当の意味であり、この意味の不決定性、不明瞭性こそ、彼らの存在基盤になっているといえよう。Mrs. Beale の結婚前の名 Miss. Overmore は、彼女がもともと生産的な階級を超え出る人間であったことだけを示すのではない。その名はまた、限定された意味の領域から常に流れ出し、逃れ去る非生産的な階級の人間の剰余性 (over-more) をも明らかにしているのである。非生産的な階級に属する Sir Claude 達は、不在の存在とならなくとも、appearance を自らの reality たらしめることによって、特定の意味に捕われない剰余的な存在となっているのだ。

IV

このような Sir Claude 達と対極に位置するのが、Mrs. Wix である。

Mrs. Wix は、Mrs. Beale の後任者として Maisie の家庭教師になるが、同じ家庭教師であっても、Mrs. Beale とは著しい対照をなす。Mrs. Beale は、家庭教師でありながら家庭教師を逸脱した存在であったが、Mrs. Wix は、反対に、家庭教師という生産的な階級にふさわしい存在である。彼女は、母親のイメージを喚起させる点で、Mrs. Beale や Ida とは全く異なっている。

What Maisie felt was that she [Mrs. Wix] had been, with passion and anguish, a mother, and that this was something Miss Overmore was not, something (strangely, confusingly) that mamma was even less.
(p. 24)

Mrs. Wix は、およそ家族という概念の解体してしまった世界の中で、ただ一人家族について語り、家庭的な雰囲気をかもし出すことのできる人間である。彼女は、馬車でひき殺された自分の小さな娘 Clara Matilda について Maisie に語り、“She’s your little dead sister” (p. 24) と述べて、Clara と Maisie を “sister” という絆で結びつけようとする。会話の端々に自分自身の生活を垣間見させる Mrs. Wix からあふれ出るのは、“fountains of homeliness” (p. 27) なのである。

生産的な階級の存在基盤である家族、娘 Clara と夫 Mr. Wix を共に失いながらも、家庭的なイメージで描写される Mrs. Wix は、紛れもなく、生産的な階級の一員である。彼女が、“peculiarly and soothingly safe; safer than any one in the world, than papa, than mamma” (p. 26) であるのは、生産的な階級の持つ確固とした意味体系を、彼女もまた、持っているからだ。彼女の存在をしっかりと固定する意味体系、それは、彼女が Maisie に行く教育からも分かるように、moral sense であり、彼女はこの moral sense の体現者なのだ。

moral sense を信奉する Mrs. Wix にとって、この意味体系からはみ出した Sir Claude 達は、厄介な存在であり、Mrs. Wix は、彼らを正して、自分の意味体系の中へ何とか引き入れようとする。Mrs. Wix は、Sir Claude

について、“He’s a wonderful nature” (p. 97) という意見を持っており、まだ矯正の可能性のある Sir Claude に、仕事と家族を生活の足場とすることを勧める。Mrs. Wix の考えによれば、公職につき国会議員になることによって、Sir Claude は自分の置かれている “awful misery” (p. 98) から救われるのであり、また、義理の娘 Maisieこそ、彼の生き甲斐となりうるのである。

“I do [appeal to you], Sir Claude, in the name of all that’s good in you—and oh so earnestly! . . . What you’ll do for our young friend [Maisie] here I needn’t say . . . What I want to speak of is what you’ll *get*—don’t you see?—from such an opportunity to take hold. . . take hold of *her*. Make her your duty—make her your life: she’ll repay you a thousand-fold!” (p. 106)

Mrs. Wix は、Sir Claude を家族と仕事で縛ることによって、彼を自分と同じ生産的な階級の人間らしい存在にしようとするのである。だが、Sir Claude は、Mrs. Wix の勧告には従わず、議員になることもなく、Maisie の父親となる代わりに、Mrs. Beale の恋人となる方を選ぶ。Mrs. Wix の努力は、結局、何らの成果をももたらさないのであるが、それでも、Mrs. Wix は、Sir Claude 達のあり方はまちがっており、そのふるまいは “immorality” (p. 272) であるときびしく非難せずにはおられない。しかし、Sir Claude 達は、Mrs. Wix の意のままになるような人間ではないのだ。“oh . . . all his airs served him!” (p. 238) と述べられているように、appearance をこの上なく巧妙に駆使する Sir Claude は、Mrs. Wix にとって手に余る人間であり、彼の持つ appearance の見事さに、Mrs. Wix 自身圧倒されてしまう。

Oh he was princely indeed: that came out more and more with every word he said and with the particular way he said it, and Maisie could feel his mistress [Mrs. Wix] stiffen almost with anguish against the increase of his spell and then hurl herself as a desperate

defence from it into the quite confessed poorness of violence, of iteration. (p. 261)

Mrs. Wix を圧倒する appearance を持つのは、Sir Claude だけではない。Mrs. Beale もまた、自分の都合のいいように、自分の “strategic air” (p. 300) を使って、Mrs. Wix を懐柔しようとする。Mrs. Beale にきびしい批判の言葉を投げつけてきた Mrs. Wix が懐柔されるのを見て、Maisie は、Mrs. Wix と Mrs. Wix の moral sense が果たして持ちこたえられるのだろうかという疑念を抱く。“She [Maisie] became on the spot quite as interested in Mrs. Wix’s moral sense as Mrs. Wix could possibly be in hers” (p. 301)。そして、Mrs. Beale を受け入れたのかどうか答えようとしない Mrs. Wix に、Maisie は、“Oh you’re nobody!” (p. 309) と叫ぶのであるが、この言葉は、appearance と対峙した時の moral sense のもろさと、その moral sense を提唱する Mrs. Wix の “human weakness” (p. 331) を如実に示しているといえよう。

だが、moral sense は社会の規範として十分な有効性を持ち、その規範に則っている人間は weak ではなく、むしろ strong なはずである。moral sense 側の人間が weak であるとは、逆説的な言い回しではあるまいか。

この逆説的な考え方、一種の価値逆転の教義を、Friedrich Nietzsche は、*Zur Genealogie der Moral* (1887) の中で展開している。Nietzsche は、強固な社会倫理となっている道徳を、怨みっぽくずる賢い奴隷的な人間の「反感」“Ressentiment” から生まれたものであると考える。⁷⁾ 奴隷的な人間、生が貧困である弱者は、自分よりも強い人間、生が充溢した強者を悪人とみなすことによって、自分を正当化し、「善」“Gut”と「悪」“Böse”の根本概念をそこから発生させるわけで、道徳と道徳的な生き方を理想化した「禁欲主義的理想」“asketische Ideale”の前提は、「生の貧困」“eine gewisse Verarmung des Lebens”⁸⁾なのである。そして、これらの概念を、Nietzsche は、生に対する、人間的なものに対する反逆であると規定する。

dieser Haß gegen das Menschliche, mehr noch gegen das Thierische, mehr noch gegen das Stoffliche, dieser Abscheu vor den Sinnen, vor der Vernunft selbst, dieser Furcht vor dem Glück und der Schönheit, dieses Verlangen hinweg aus allem Schein, Wechsel, Werden, Tod, Wunsch, Verlangen selbst — das Alles bedeutet, wagen wir es, dies zu begreifen, einen *Willen zum Nichts*, einen Widerwillen gegen das Leben, eine Auflehnung gegen die grundsätzlichen Voraussetzung des Lebens. . . .⁹⁾

道徳的な生き方を理想化した「禁欲主義的理想」は、あらゆる本来的な生のあり方から逃避する「無への意志」「*einen Willen zum Nichts*」、ニヒリズムであるときみなされているが、この「無への意志」は同時に「真理への意志」でもある。“jener unbedingte Wille zur Wahrheit, das ist der *Glaube an das asketische Ideal selbst*”¹⁰⁾。道徳という意味体系を確立することは、道徳を絶対的な価値判断の手段とし、それによって、全てのものを一定の方向へ意味づけし、序列化していくことであり、必然的に自ら信じるころの truth を志向することになる。事実、Mrs. Wix は、Maisie に話してきかせる fiction できえ、“the blue river of truth” (p. 27) が流れる舞台にしてしまうほど、自ら信じる truth を確固と持った人間である。生からの逃避が truth をめざす意味の固定化であるならば、本来的な生のあり方は、そのような固定化を常に無効にするような truth を欠くあり方だといえる。果たして、Nietzsche は、芸術が「禁欲主義的理想」と対立する根拠として、truth の不在、あるいは否定を挙げている。

die Kunst, in der gerade die *Lüge* sich heiligt, der *Wille zur Täuschung* das gute Gewissen zur Seite hat, ist dem asketischen Ideale viel grundsätzlicher entgegengestellt als die Wissenschaft. . . .¹¹⁾

本来的な生がめざすのは、truth ではなく、「虚偽」「*die Lüge*」であり、本来的な生を支配するのは「真理への意志」ではなく、「斯瞞への意志」「*der Wille zur Täuschung*」なのである。

そして、このような本来的な生のあり方をするのが、道徳的な弱い生き方をする弱い人間と対置される強い人間であるが、斯曠的なあり方をし、*moral sense* を具現する Mrs. Wix と対立する Sir Claude 達は、非力なはずではなかったか。Sir Claude 達は、意味の生産行為に加わることができないために、*appearance* を利用することで、意味体系から逃れ出た。しかし、Sir Claude 達の存在を支える *appearance*こそ、先程の引用部分の中で、Nietzsche が、本来的な生の構成要素の一つに数えている「外見」「*Schein*」に他ならない。つまり、彼らは、非力であることによって、まさにその非力さのゆえに、本来的な生を生き、逆に Mrs. Wix 側の人間よりも強い存在となりうるのである。意味を生み出せない非力さを、本来的な生を生きる力強さにすり変えるこのしたたかさによって、Sir Claude 達は、社会の中枢に位置しないにもかかわらず、中枢部の人間よりも優位、上位に立つのである。

V

James W. Gargano や Paul Armstrong は、Sir Claude 達外界を Mrs. Wix が表わしている *moral sense* で捕えることは不適切、あるいは捕えられないと認めながらも、なお、社会規範ではなく、Maisie 個人の経験による外界把握は可能であると考えている。¹²⁾ Maisie は、外界に柔軟に反応することで、認識をつちかってゆき、彼女の経験の “the various aspects” は、“combine to form a systematically unified whole”¹³⁾。つまり、Maisie が経験する外界は、“a systematically unified whole” となりうるものであり、Maisie は、自らの経験によって、外界を構造的に意味づけることができるというわけだが、こうした経験による外界把握は、社会規範による外界把握と根本的には何ら変わりがないではないか。外界は、そのような整然とした意味づけを拒み、拒むことによって、自らの存在を強力なものにしているものであり、経験によっても、社会規範によってと同様、外界認識は不可能だといえる。

Maisie の外界である非生産的な階級は、捕えどころのない、実に近代的な権力機構であろう。剰余性、意味づけによる到達不可能性を武器とするこの階級は、社会の中心からはずれているはずであるのに、中心にあるべき生産的な階級よりも優位に立つことによって、依然として、中心にとどまっているともいえよう。だが、この中心は、意味で充足した実体を欠く、空虚な中心であるのだ。

注

- 1) Stuart Hutchinson, *Henry James: An American as Modernist* (London and New Jersey: Vision and Barnes & Noble Books, 1983), pp. 61-62.
- 2) テキストは、Henry James, *What Maisie knew*, New York Edition, Vol. XI (New York: Charles Scribner's Sons, 1908) を用いた。以下、本文からの引用はこの版により、頁数のみを引用文末尾の括弧内に記す。
- 3) John Carlos Rowe, *The Theoretical Dimensions of Henry James* (Wisconsin: The University of Wisconsin Press, 1984), pp. 120-146.
- 4) Shoshana Felman, "Turning the Screw of Interpretation," *Yale French Studies*, 55/56 (1977), 94-207.
- 5) Rowe, p. 139.
- 6) *Ibid.*, p. 138.
- 7) Friedrich Nietzsche, *Zur Genealogie der Moral* (Berlin: Walter de Gruyter & Co, 1968), pp. 271-303.
- 8) *Ibid.*, p. 421.
- 9) *Ibid.*, p. 430.
- 10) *Ibid.*, p. 418.
- 11) *Ibid.*, p. 420.
- 12) James W. Gargano, "What Maisie knew: the Evolution of a 'Moral sense,'" (1961) in *Henry James: Modern Judgements*, ed. Tony Tanner (London: Macmillan, 1968), pp. 222-235. Paul Armstrong, *The Phenomenology of Henry James* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1983), pp. 3-36. 現象学的観点に立つ Armstrong は、認識論的危機状況をこの小説にみてはいるが、彼の考え方の底流にあるのは、一種の optimism であろう。"experience itself provides a foundation that... allows us to discover and justify purposes and values to guide our lives" (p. 211).
- 13) Armstrong, p. 8.